

## エッセイ 楽しい“虫音楽”の世界（その7 雅楽の中の昆虫たち）

昆虫芸術研究家

柏田 雄三（かしわだ ゆうぞう）

映画「羅生門」や「七人の侍」の音楽を作ったことで知られる日本を代表する作曲家の一人、早坂文雄に「左方の舞と右方の舞」という曲名の管弦楽曲がある。この「左方の舞」と「右方の舞」とは舞楽の用語で「左方の舞」は中国（唐）から、「右方の舞」は朝鮮半島（高句麗）から伝わって来た伝統的な舞楽の様式を指している。早坂氏の曲そのものは作曲者によると雅楽的ではあるが雅楽の形式にとらわれず自由に書かれたものである。それにしても何とも想像力を掻き立てる曲名ではないか。

舞楽とは雅楽器の伴奏で舞を鑑賞する雅楽のことを言う。その雅楽には昆虫に関係した演目がある。まず「胡蝶」は「右方の舞」に属していて、「迦陵頻」と番となる演目である。蝶の姿をした四人の少年（巫女）が山吹の枝を持って舞う優雅な演目で、千年以上も昔の延喜6年（906年）に楽を藤原思房、舞を教実親王が作ったと伝えられている。このように子供が舞う演目のことを「童舞または童舞」などと呼ぶ。「迦陵頻」も童舞で、鳥の羽をつけて踊られ、極楽にいる霊鳥「迦陵頻」が飛来した様子を表している。

平安の昔から奈良、大阪、京都で伝承されてきた雅楽の演目は明治維新の東京遷都を機に「明治撰定譜」に集約された。その過程でそこに採用されなかった多くの曲が廃れてしまったそうだが、古譜の掘り起こしによって江戸時代まで演奏されていた曲や舞を蘇らせようとする動きがある。そのような団体の一つで京都安部家に伝わる雅楽を研究している三田徳明雅楽研究会の上演を鑑賞した。そのなかで「胡蝶」が上演されたが、安部家に伝わる「胡蝶」には二つの楽章があり、現在の「胡蝶」はそのうちの「胡蝶急」に相当するのだそうだ。その「胡蝶」を新たに見つけた「胡蝶破」とともに楽しんだ。若い女性が背負っている彩色された大きな蝶の翅にゆったりとした踊りの動きが加わるとアゲハチョウかタテハチョウをデザイン化しているように見えた。

「甘州」は唐の玄宗皇帝の作とも言われる「左方の舞」に属する舞楽である。甘州は甘竹という竹が密生している中国の地名であるが、そこにたくさんいる毒蛇、毒虫等のために死者が続出し竹を切り出すことができなかった。そこでこの舞楽を演奏すると毒虫たちは曲が自分たちを食べる怪鳥金翅鳥の鳴き声に聞こえて恐れるので、人は被害に遭わずに竹を切り出すことができたという。金翅鳥とはガルーダ・インドネシア航空のマークにも使われた伝説上の鳥ガルーダのことである。

このほか「褰頭楽」は、唐の時代にその装束や演奏によって百年に一度大発生する蜂や蛾を死滅させることができたと言われる演目である。

江戸時代までは田圃で害虫が大発生すると祈祷や虫送りによって頼っていたことや、ヨーロッパでも18世紀まで動物裁判によって虫に退散や破門を命じたりしていたことはよく知られている。ヨーロッパでの動物裁判のことは池上俊一著の「動物裁判」（講談社現代新書）に詳しく記されている。雅楽の演奏によって害虫を退治しようとする考えがこれらを千年もさかのぼる昔にあったとはまことに興味深いことである。



「胡蝶」が上演された三田徳明雅楽研究会主催の演奏会チラシ